

the Jumping Frog Story 研究（Ⅱ） —— Mark Twain の世界

岸 上 眞 子*

Mark Twain (1835-1910) の出世作といえる “Jim Smiley and His Jumping Frog” は New York の *Saturday Press* 誌（1865年11月18日刊）に掲載され、一世を風靡した作品である。彼の名前は作品と共に広く知られることになったが、著作権が確立していない時代ゆえに、作者に無許可で大量に印刷され、誤植のみならず、内容の改竄も行われ、その結果様々なヴァージョンが誕生した。Mark Twain 自身この作品発表後1ヶ月も経たない同年12月16日に、“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” へと題名を変え、San Francisco の *Californian* 誌に発表し、その後も何度も手を入れ、出版し続けた。⁽¹⁾

本論では、代表的といえる次の3つのヴァージョンを取り上げ、詳細な分析を進めることとする。

“Jim Smiley and His Jumping Frog”

“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”

“The Notorious Jumping Frog of Calaveras County”

“Jim Smiley and His Jumping Frog” は、University of California Press から刊行されている *The Works of Mark Twain* シリーズの1つ *Early Tales and Sketches Vol. 2* (1864-1865) から、2番目の “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” は、*Californian* 誌に発表された作品を入手できなかった為、1867年に出版された *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County, And other Sketches* そのものがリプリントされた *The Oxford Mark Twain* シリーズに収容されている “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” を、3番目の “The Notorious Jumping Frog of Calaveras County” は、2番目と同様に作者が出版した作品そのものがリプリントされた *The Oxford Mark Twain* シリーズのものを text として使用する。

*コミュニティ政策学部 教授

(1)

1. 題名

既に言及したように、最初の発表後1ヶ月もたたないうちに出版した2度目のバージョンから作品の題名(“Jim Smiley and His Jumping Frog”)を“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”へと変えている。10年後の1875年に出版した*Mark Twain's Sketches, New and Old*に収めた“The Jumping Frog in English, Then in French, Then Clawed Back into a Civilized Language Once More by Patient, Unremunerated Toil”と題す作品の中で、“Celebrated”のみ“Notorious”に変え、“The Notorious Jumping Frog of Calaveras County”とした。この“Notorious”と形容する方が題名として一般化した為に、1865年刊としながらも“Notorious”を付すといたったありえない組み合わせで出版⁽²⁾もされており、読者は疑心暗鬼にさせられる事態が続いている。

作者は何故瞬く間に題名を変えたのであろうか。最初の題名で既に爆発的な売れ行きをみせていたのにも係わらず、敢えて変えたのは何故であろう。全国区となったばかりの新人である。この跳び蛙の話のアメリカ全土に広めたのは作者Mark Twain自身であっても、彼のオリジナル作品ではないということに一因があろう。元はmining campで聞いたtall taleであり、作者が練り上げて作品化しない限り、その地域だけのホラ話に終わったかもしれない。あまりに有名としてしまった故に、自分の独創的な作品と捉えられることに一線を画する意図があったのではなかろうか。“Celebrated”「名高き」という言葉を入れることによって、地元カラヴェラス郡ではよく知られた蛙の話であり、自ら創り上げたストーリーではないとの防戦にまわったといえる。オリジナリティについて後世になって問題視する向きがあるが、著作権がなかった時代のことであり、一般の意識は今と隔世の感があることを踏まえたい。

Calaverasとは実際の地名だが、「頭蓋骨」とか「無法者」の意味を持つスペイン語calaveraを語源とし、Calaveras郡では「骸骨」の意で使っているの、これを受けて3バージョンの題名を和訳すると、「ジム・スマイリーと彼の跳び蛙」、「骸骨郡の名高き跳び蛙」及び「骸骨郡の悪名高き跳び蛙」(“Celebrated”も“Notorious”も「名が知られた」との意であるが、後者には「評判が悪い」というニュアンスが含まれる)となる。以上を並べてみて、読者はどのように感じるであろうか。シンプルなものから、思わせぶりなものへ、好奇心をおこさせる題名へと変えている。尤も作品の知名度が高まった後の題名変更であることにも留意したい。

2. 冒頭部

3つのバージョンは、どれもframe-storyの形を取り、作品に厚みを持たせるのに効果をあげているが、導入部における変更は作者の意図するところの変化を如実にあらわしている。そもそもFrog関連のストーリーはArtemus Ward(1834-1867)からの執筆依頼に答える

ために筆を取ったというのが通説である⁽³⁾。この手紙による申し出の趣旨とは一致しないものの、Artemus Ward 当人に Mark Twain が手紙で答える形をとる冒頭となっているのが “Jim Smiley and His Jumping Frog” (以下 “Jim Smiley” 版と略) である。

MR. A. WARD,

DEAR SIR: —Well, I called on good-natured, garrulous old Simon Wheeler, and I inquired after your friend Leonidas W. Smiley, as you requested me to do, and I hereunto append the result. If you can get any information out of it you are cordially welcome to it.⁽⁴⁾

このように Ward 宛の手紙とするのは、下書きとされる “The Only Reliable Account of the Celebrated Jumping Frog” (以下 “The Only Reliable Account” 版と略) を踏襲したものである⁽⁵⁾。

この冒頭部は、1867年版 “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” (以下 “The Celebrated” 版と略) で、次のように書き直された。

IN compliance with the request of a friend of mine, who wrote me from the East, I called on good-natured, garrulous old Simon Wheeler, and inquired after my friend's friend, *Leonidas W. Smiley*, as requested to do, and I hereunto append the result.⁽⁶⁾

“The Only Reliable Account” 版では作品導入部においてのみ手紙の形を使ったが、“Jim Smiley” 版では手紙の形に拘り、最後まで手紙の形式に従い、“Yours, Truly, MARK TWAIN.” で結んでいる。これほど手紙形式に徹したのにもかかわらず、“The Celebrated” 版には手紙文に典型的な起首や書き留めの表現が一切ない。手紙で依頼されたこと、その依頼内容、それを受けて “I” は出かけて依頼通りのことをしたこと、そしてその結果報告の内容としたこと、以上の点で2つの版は同じ展開となっている。何故手紙形式をやめたのであろうか。この答えの中に作者の意図があると思われる。

“Jim Smiley” 版の中で “I” として登場するのは作者本人 (Mark Twain) であり、“you” は Ward であることに間違いはない。それに対して、“The Celebrated” 版では、固有名詞を完全に消し、依頼主を “a friend of mine” へと変えた。具体的に誰なのかについて触れていないものの、その友人が東部から手紙をよこしたことを明示している。ここに “the East” と加筆したことは重要な意味を持つ。依頼主は東部在であり、東部の人、東部の価値観を持つ人、東部を代表する人となり、東部そのものを表すことになる。彼が東部から指示するということは、主人公は西、つまり西部在の西部の人となり、東部 (東部人) が西部 (西部人) に対してなしたことになる。このように東部と西部の価値観を浮かび上がらせ、その対立、衝突、相克を

(3)

描くことは、Mark Twain作品の大きな特徴の1つであり、“The Celebrated”版において、この東部と西部の対立関係を明確にしたといえる。

“The Celebrated”版では“a friend of mine”のみならず“I”も誰を指すのか断定できないようになっている。書き手がMark Twainであるとの明示をすることを止めたことによって、Iは作中でより自由な言動が可能となったことは確かである。語り手は必ずしも筆者の視点や思いと一致させる必要がないからである。“Jim Smiley”版では、既に作家として名を成していた原稿依頼主のArtemus Wardを巻き込むことで、Wardの知名度や名声をある程度活用できたであろう。しかし実在の有名人を使うことで、作品世界を狭くせざるを得ない場合もある。手紙文とすることを止め、Ward及び自分の名前を消すことで、作者にとっては極めて自由な作品世界の導入が叶ったといえよう。その結果、テーマの明確化を叶え、この作品の意図が読者にとって把握しやすいものとなった。

引用(4)にあるように、“Jim Smiley”版の手紙文最初の単語は“Well”であり、Wardがその場にいるような出だしであるが、最初の文において、主語を全て“I”とし、同じパターン(“ , and”)で繋ぎ、“I”を3回繰り返している。“The Only Reliable Account”版の冒頭的主語“I”の使用を1回から2回増やして3回とした。“The Celebrated”版では1回減らし2回に戻している。“Jim Smiley”版は、Wardが目の前にいるような喋り口調としたために、“I”であるMark Twainの気持ちが反映される表現となった。この気持ちとは「憤慨」であろう。“The Celebrated”版の出だしが淡々と映る一因は、例えば“as you requested me to do”から“as requested to do”への変更に見られるように、人称代名詞使用を減らしたことによる。手紙文を採用することを止めた結果、特に2人称が使えなくなり、その代替の為の関係代名詞使用によって、語調に変化が認められる。

WardのMark Twainへの依頼内容は、「Simon Wheelerの元へ行って、Wardの友人であるLeonidas W. Smileyについて尋ねてくる」ことである。“The Celebrated”版でも同じ内容の依頼文が“I”(= narrator)の友人から届く。ニュアンスを生かして意味を取ると「(この依頼に応じて、)僕は(わざわざ)足を運んで、(わざわざ)あなたの友達のことを尋ねた。あなたがそのようにすることを僕に要求した通りにネ」となる。「わざわざ」とは表現していないものの、1人称を連ねるということは“I”(= Mark Twain)の感情が潜んでいると受け取ることが可能である。これに続く“If you can get any information out of it you are cordially welcome to it”を文面通り素直に受け取れるであろうか。Wardにとって嫌味な一文ではなかろうか。“The Celebrated”版ではこの文章は完全に抹消されている。

「語りの真骨頂は“gravely”に語ることに徹することにあり、語り手は感情を吐露しないよう最善を尽くすべき」というのが、Mark Twainの持論⁽⁷⁾であることは既に言及⁽⁸⁾したが、ここで当てはめて考えてみると、何故以上のように書き直したのか、作家の真意が見えてく

るだろう。読み手の爆笑を引き出すには、語りや語り手のクール度が決め手となると Mark Twain は考え、実践し、作品世界でも生かしたのである。

なお “The Celebrated” 版と 1875 年刊行の “The Notorious Jumping Frog of Calaveras County” 版 (以下 “The Notorious” 版と略) との違いは, “*Leonidas W*” の部分のイタリック体を外したことのみである。つまり, “Jim Smiley” 版へ戻したことになる。同じ文の中に “old Simon Wheeler” という固有名詞があり, ここで差別化し強調するよりは, 次の文のみでイタリック体とすることで際立たせることを選んでいる。

引き続き第 1 節を読み進んでいくと, 作者が推敲するにあたって狙ったことが見えてくる。引用 (9) は “Jim Smiley” 版であるが, 引用 (10) の “The Celebrated” 版との違いを挙げていくこととする。

I have a lurking suspicion that your Leonidas W. Smiley is a myth—that you never knew such a personage, and that you only conjectured that if I asked old Wheeler about him it would remind him of his infamous *Jim Smiley*, and he would go to work and bore me nearly to death with some infernal reminiscence of him as long and tedious as it should be useless to me. If that was your design, Mr. Ward, it will gratify you to know that it succeeded. ⁽⁹⁾

I have a lurking suspicion that *Leonidas W. Smiley* is a myth; that my friend never knew such a personage; and that he only conjectured that, if I asked old Wheeler about him, it would remind him of his infamous *Jim Smiley*, and he would go to work and bore me nearly to death with some infernal reminiscence of him as long and tedious as it should be useless to me. If that was the design, it certainly succeeded. ⁽¹⁰⁾

この 2 つの引用の違いは 11 箇所にあつた。まず, 2 人称の代名詞の削除関連のところ (5 箇所) 及び Ward への呼びかけ削除 (1 箇所), punctuation の変更 (dash → semicolon 1 箇所, comma → semicolon 1 箇所, comma 追加 2 箇所), 固有名詞のイタリック体への変更 (1 箇所) を認めることが出来る。この部分の変更は, 手紙形を止めたことから来るもの以外は, 読者にとって分かりやすい文章にする為になされている。この節の結びとなる “it will gratify you to know that it succeeded” は, “it certainly succeeded” へと書き改められているが, “it will gratify you” の表現から “I” の感情を読み取ることが可能であり, 皮肉や非難とも解釈できるので, 淡々とした語りをルールとする以上, この部分を削除し短縮するに至ったといえる。ただし, “useless to me” という表現を引き続き使ったことは, 語り手の強い感情が表されていると解釈可能である。use あるいは useless とするかについては, Mark Twain の作品上見逃

してはならないポイントである。この部分は一切変更されることなく、3つの版とも同一である。

“The Notorious”版では、“The Celebrated”版で変更した部分を“Jim Smiley”版へ戻している例も認められる。繰り返しとなるが引用(4)の“Leonidas W. Smiley”のイタリック体への変更、引用(10)の“if”直前のcomma挿入、このどちらも取り止めている。文章の読みやすさを図る為であり、細かく推敲を続けていることが分かる。また引用(10)の“nearly”削除、“infernal”から“exasperating”への変更、“tedious”の前に“as”を挿入、“certainly”の削除をしている。その結果、(i) tall taleの持ち味である「誇張」と(ii)当時主流であった genteel tradition「お上品な伝統」への配慮からの「単語の上品化」を進め、(iii)文章を分かりやすい平易な表現にしている。この(ii)に該当する言葉は、“infernal”であるが、ここでは「忌々しい、ひどく」の意味で使っているが、元々の意である「地獄／悪魔の、地獄／悪魔のような」は、genteel traditionからすると「忌むべき言葉」であり、排除の対象となる。“exasperating”は、そのような忌むべきニュアンスが含まれず、誇張するには適語と判断したのであろう。“certainly”については、“The Celebrated”版で2人称の代名詞を削るにあたって加筆された語であるが、“The Notorious”版で元に戻り、簡潔に仕上げている。

次の第2節は現地報告となっている。どの版でもIが要求に応じて現地へ赴き、Simon Wheelerを見つけるのだが、その場及び彼の様子について認めた後に、依頼事項の内容を彼に伝えている。先ずその場についてであるが、以下、発表された順に引用する。

“the little old dilapidated tavern in the ancient mining camp of Boomerang” (“Jim Smiley”版)⁽¹¹⁾

“the old, dilapidated tavern in the ancient mining camp of Angel’s” (“The Celebrated”版)⁽¹²⁾

“the dilapidated tavern in the decayed mining camp of Angel’s” (“The Notorious”版)⁽¹³⁾

“dilapidated”という単語は草稿でも頻繁に用いているが、「荒廃ぶり」を表現する時に必ず使用している。この3つの引用を比較すると、後になるほどシンプルになり、具体的なイメージを持ちやすい表現にしていることが分かる。この地における栄枯盛衰はほんの数年の間に起きたことであり、「栄&盛」に到る加速度も「枯&衰」までの減速度も過激なほど急であったこともあわせて考えると、“old”や“ancient”が形容詞として適切かどうかについての答えがでる。語り手にとって「懐かしさ」の対象となる場ではないので、“old”は親しみを表す形容としては使っていない。単に「古い」という意味での使用である。“ancient”も同様であるが、大昔を感じさせるニュアンスを持つので、どちらも厳密な意味での確さを欠くと

いえるであろう。

ここで最も重要なことは地名の変更である。Boomerangは架空であるのに対して、Angel's (=Angel's Camp) はCalifornia州Calaveras郡にある実際の地名である。しかも作者自身最初の“Jim Smiley”版を発表する約1年前から3ヶ月半程滞在している⁽¹⁴⁾。繰り返しとなるが、そもそもこのJumping Frogのtall taleの話 Mark Twainが聞いたのは、この期間中のことであり、同地あるいは周辺のmining campであったとされる。つまり事実に基づく地名へと変えたのである。実際の人物(Ward)へMark Twain自身が送った手紙としながらも架空の地名とした“Jim Smiley”版であるが、作中の雰囲気は西部のmining campに他ならない。この地名だけが浮いてしまう結果となっている。また“The Celebrated”版から加筆された前述の“the East”を生かすには、つまり作者の意図の一つである東部対西部という構図を明示するには、架空の地名の使用には無理がある。題名に現実の地名(Calaveras County)を入れた以上、組み合わせとしてBoomerangは有り得なくなったのであろう。

この第2節では、前節と同様に、名前を明確化するためにイタリック体への切り替え、及びpunctuationの変更をしているが、“The Notorious”版で元に戻している場合もある。接続詞thatの後に来るif節前のcommaの有無については、前節同様“The Celebrated”版で加筆したものの、“The Notorious”版で削除し統一をはかっている。その他この部分では、上述(iii)の「文章の分かりやすさ追求した結果」としての変更となっている。

第3節に入ると直ぐにIは受身に回り、Simon Wheelerのペースに完全に巻き込まれてしまう。この部分の“Jim Smiley”版と“The Celebrated”版の違いは8箇所あり、punctuationの変更が4箇所(dash → comma 1箇所, dash → semicolon 1箇所, comma追加2箇所)、単語削除1箇所、単語加筆1箇所(その後“The Notorious”版で削除)、イタリック体に変更1箇所、単語分断1箇所(“anything” → “any thing”としたが、“The Notorious”版で戻す)を認められる。変更の主旨は、他の節と同様に文章を分かりやすくする為であるが、音読した場合や見た目も意識しているといえる。

このSimon Wheelerの語りを始めるにあたっての態度と語り口は、Mark Twainにとって理想的なものとして描きこまれている。表情一つ変えず、声音も同じで、“the slightest suspicion of enthusiasm”⁽¹⁵⁾を吐露することなく、“the monotonous narrative”⁽¹⁶⁾に徹している。それにも拘らず“there ran a vein of impressive earnestness and sincerity”⁽¹⁷⁾となっている。ここではこのようなSimon Wheeler (= “he”)が、畳み掛けるように7連続で主語となり、その間“I”は3回(“The Celebrated”版では4回)目的格“me”となって受身に回り、如何に一方的であるか、巧に表現されている。彼はstory tellerとしてMark Twainにとっての理想の具現化であるので、完璧に役割を果たすように運ばれている。“anything ridiculous or funny about his story”⁽¹⁸⁾があると全く思っていないこと、彼のストーリーが“a really important

matter”⁽¹⁹⁾として語り続ける。

ここまでは3版とも同一の内容であるが、この節最後の部分を“The Notorious”版では大きく変えている。

To me, the spectacle of a man drifting serenely along through such a queer yarn without ever smiling was exquisitely absurd. As I said before, I asked him to tell me what he knew of Rev. Leonidas W. Smiley, and he replied as follows.⁽²⁰⁾

I let him go on in his own way, and never interrupted him once:⁽²¹⁾

引用(20)及び(21)は“Jim Smiley”版であるが、“The Celebrated”版になった時、2行目の“smiling”の後にcommaを挿入した以外は一切手を入れていないのに対して、“The Notorious”版では、引用(20)全部を削除し代替の文章を書き加えることなく、引用(21)に飛び、最後のpunctuationをcolonからperiodに変えて終わっている。この2つの引用の前の部分では上述したようにSimon Wheelerの様子と語り口について、“I”がなされるがままになって、報告している形を取っている。しかし引用(20)になって始めて自分(=“I”)がどのような思いを抱いたのか、どのように感じたのかについて、“queer”及び“exquisitely absurd”から読み取れるようになってきている。この節の最初から受身に徹し、目的格meを3回(“The Celebrated”版では4回)続けた後に“To me”を文頭に持ってきた中に、強い感情を伝えようとの意図が見える。しかし、この段階で極めつけとなりうる強い思いを語り手“I”が表す必要性より、前述と同様の意図を先行させ、語り手“I”の感情表出を抑える為に、またSimon Wheelerの話がどのようなものか、“a queer yarn”であるかどうかは、読み手や聞き手が話を聞いてから決めることであり、前提として必要ないとの判断から“The Notorious”版では引用(20)を消したといえる。予め括って先入観を与えるのは得策ではないゆえ、この段階で“I”の口から答えを呈示したり、臭わすことを回避した。“As I said before”以下も削除したのは、この文章の意味そのままであるが、繰り返しを避けたのであろう。引用(21)は、7連続主格の彼の仕打ちに対して、“I”がどのように対応したかについての説明になっている。

Iが語り手となる導入部は、この第3節で終わりとなるが、ここまでを振り返ると以下ようになる。(i)最も大きな変更は、作品を手紙とすることを止めたことであり、(ii)その結果、固有名詞や人称代名詞を変え、作中からWardもMark Twain自身の名前も消すことになった。(iii)代わりに東部対西部の構図を明確化し、作品世界の自由度を高めている。また(iv)架空の地名を止めて実際の地名と一致させ、形容する言葉の選択も具体的イメージを抱きやす

いものに変えている。(v) 文章表現上の推敲も続けられ、punctuationへの目配せが目立っている。ただし“The Celebrated”版で手を入れたものの“The Notorious”版で“Jim Smiley”版に戻す場合も少なくない。(vi) 変更の主要な目的は、文章を分かりやすくする為といえるが、同時に、Simon Wheelerの語りの部分と対比的にすることも目指している。つまり、frame narratorの語る部分を書き言葉とし、第4節から始まるSimon Wheelerが述べる部分は口語としている。区別化といえるが、後述する。(vii) 例は少ないが、tall taleやgenteel traditionを意識し、語り手を作者の理想に近づける為に、frame narratorであるIも感情が表出するのを減らす方向としている。

3. 導入部 (第4節)

第1節目から3節に亘る冒頭部はframe narrator (つまり書き手であり、語り手でもあるI, Mark Twain自身)が進行役であるが、第4節目から作品最後近くまで、語り手は専らSimon Wheelerとなる。それにともないIはSimon Wheeler自身に変わり、第3節目までのIは聞き手となり、youの位置を維持し、最後まで一切登場しない。どのように、この語り手の引継ぎ部分を進めているのかについて、先ず取り上げることとする。

視覚的な効果もあるので、3版とも引用(22)~(24)として列挙する。“Jim Smiley”版ではcolonで終わり、次の行は半角22字分のdashのみを入れ、その次の行からSimon WheelerがIとなって作品最後近くまで話を続ける。“The Celebrated”版では次行のdashを削り、代わりに1行空けてから、同じように語り手を変えて進めている。“The Notorious”版になってcolonではなくperiodで終え、1行も空けることなく、段落は変えたもののdouble quotation marksを使い、そこからSimon Wheelerの語りを始めている。引用(22)及び(23)ではSimon Wheelerがframe narratorの依頼を無視して、全く違う人物Jim Smileyについて初端から話を始めているが、“Jim Smiley”版は手紙の形を取っているので、このような形としたと考えられる。ストーリー展開を円滑にする為に、引用(24)ではframe narratorでは一応は名前を繰り返させる巧さを見せ、作家の円熟した腕前を感じさせる工夫が盛り込まれている。“The Notorious”版に至って、完全に手紙文から離れたといえよう。

I let him go on in his own way, and never interrupted him once:

There was a feller here once by the name of *Jim Smiley*, in the winter of '49. . . (“Jim Smiley”版)⁽²²⁾

I let him go on in his own way, and never interrupted him once:

There was a feller here once by the name of *Jim* Smiley, in the winter of '49. . . . ("The Celebrated" 版)⁽²³⁾

I let him go on in his own way, and never interrupted him once.

"Rev. Leonidas W. H'm, Reverend Le — well, there was a feller here once by the name of *Jim* Smiley, in the winter of '49. . . . ("The Notorious" 版)⁽²⁴⁾

Simon Wheeler が語り手となった第4節から第7節までは1つ1つの節が長いのに対して、第8節から最後まで節は短い。第7節から jumping frog のストーリーとなり、次の第8節から a stranger が登場するのだが、このあたりから文体や調子などを大きく変えている。以下細かく追っていくこととする。まず人称代名詞であるが、第4節では、語り手 Simon Wheeler 自身を指す1人称使用回数は4回で、最初に3回続けて使った後は激減し、第6節は3回、第7節は2回に過ぎず、他の章では全く認められない。第4節の最初の1人称は、Simon Wheeler 自身と Jim Smiley との接点に言及する為であるのに対して、他の節での1人称は、Simon Wheeler が自分の思いを聞き手に伝える為のものとなっているが、稀といえる。基本的に語り手は、自分の思いを直截にあらわすことなく語り続けているのである。これは作者 Mark Twain が求める語り手像と一致する。

2人称は、第4節では9回と多いが、第5&6節は2回ずつあり、第7節では最も多く10回となるものの、その後は使っていない。"Jim Smiley" 版の場合手紙であるので、Ward は聞き手 (you) であった frame narrator の思いを濾過した手紙を受け取ることになる。しかしながら濾過度は低い。つまり聞いたままを知らせる展開となっている。他方、"The Celebrated" 版 & "The Notorious" 版は、形としては frame narrator が聞き手 (you) であるが、2人称は必ずしも聞き手への呼びかけとはなっていない。とはいうものの、語り手が変わった第4節では1人称を連続して使った後、意識的に you を数多く使い、聞き手に回った frame narrator が teller である Simon Wheeler の前にいるように印象づける運びとしている。その後 you の使用頻度は低下し、frame narrator を意識することなく、teller が話を進める運びとしている。第7節で急に頻度が上がったのは、a jumping frog が登場したことによる。you である frame narrator 及び作品の読み手からこの蛙について理解を得る為に必死の説得をしているように見える効果があり、それを狙ってのことである。第4節も同様に捉えることができよう。つまり、蛙を初登場の Jim Smiley に置き換えれば理解可能である。

Jim Smiley を表す3人称は、第4章では最も多く32回あり、1行約45字の "The Celebrated"

版では、節の最初と最後を除いて、ほとどの行にも認められる⁽²⁵⁾。また、同 “The Celebrated” 版で第 4 節は 9 つの sentence で構成されているが、7 つの sentence で semicolon や dash を使い、文を切らずに、つまり period を使わずに繋げている。semicolon 5 回、同上 3 人称 8 回、2 人称 3 回使用の 11 行に亘る sentence もあるが、このように 3 人称を繰り返し、息をつかせることなく、畳み掛けるようにしているのは、3 人称、つまり Jim Smiley を語る為であり、次々と例示した結果である。彼の人となりについて、一気に攻め立てられるように、把握させられていく。

Jim Smiley は 1849 年の冬あるいは 1850 年の春にキャンプにやって来た人物で、殊のほか賭け好きである。運が有り、ほほいつも勝っている。賭けるチャンスを常に狙い、a horse race, a dog-fight, a cat-fight, a chicken-fight から、2 羽の鳥のうちどちらが先に飛び立つとか、彼が best exhorter としている牧師でさえ賭けの対象としてきた。その熱中ぶりは、a straddle-bug を対象とする際も時間がかかろうと、たとえメキシコに行くことになっても厭わないほどである。何に対しても賭けてしまう例として、妻が病気から快復するかもしれないと言った牧師に対して、「快復しない方に賭ける」とさえ言ってしまう。以上が第 4 節のストーリーであるが、この展開は、3 つの版とも同一である。何が違うかということ、あるいは何を工夫し続けたかということ、punctuation と word であろう。

例えば第 4 節における “Jim Smiley” 版と “The Celebrated” 版の違いは 40 箇所認められ、“The Celebrated” 版と “The Notorious” 版間では 24 箇所となっている。最も手が入っているのは punctuation である。“The Celebrated” 版で comma を 11 箇所加筆（そのうち 6 箇所 “The Notorious” 版で削除）し、“The Celebrated” 版と “The Notorious” 版で其々 comma 2 箇所を減らしている。また dash 5 つを “The Celebrated” 版で period 1, comma 2, semicolon 2 へと変えている。dash は “The Celebrated” 版の他の節でも計 7 つ減らし、“The Notorious” 版で復活させていない。comma や dash のみならず、colon, semicolon, period, イタリック体等の取捨選択を続けている。

単語の表記を分断するか否かに関わる場所でも変更が多い。第 4 節では 7 箇所認められる。

maybe → may be anyway → any way some how → somehow
 anything → any thing → anything *anything* → *any thing*
 anybody → any body → anybody any wheres → anywheres⁽²⁶⁾

矢印 (→) が 1 つある場合は、矢印の前は “Jim Smiley” 版、後は “The Celebrated” 版とし、2 つ矢印がある場合は、2 番目の矢印の後は “The Notorious” 版である。7 語中 2 語を “Jim

Smiley”版に戻している。分断以外に認められる単語の表記の変更を、同上のルールに加えて、“Jim Smiley”版と“The Celebrated”版が同じ場合は等号(=)を使ってあらわすと、以下のようになる。apostropheによって意味理解の助けにもなり、実際の音に近づけることにもなっている。

wasn't = wasn't → warn't reglar → reg'lar solitry = solitry → solit'ry,
 Providence → Prov'dence any = any → ary resk → risk → resk⁽²⁷⁾

動詞についても後の版になるほど文法的には正しくない時制を増やし、3人称単数現在のsも必要などところでさえ外す方向を強めている。

ここでもう一度確認しなければならないのは、第4節からはSimon Wheelerが語っているということである。ここからframe narratorとは違った語り口で、Simon Wheelerの世界を前面に出していくことになる。第4節以降上述のように変更が増えているが、その目的は、この語りの独自性をより一層効果的に出す為であり、一貫性を持たせる為の推敲であったといえる。草稿の段階からframe narratorが語る時は俗語や口語を使用せず、たとえframe narratorの言葉が話し言葉である時も同様で、Simon Wheelerの話す部分になってはじめて俗語や口語を使っている⁽²⁸⁾。frame narratorとtellerの言葉遣いに一線を引くのは、“Jim Smiley”版後も引き継がれ、後の版になるほど徹底化を図っている。生半可な俗語や口語使用ではない。その当時その地域のキャンプで実際使っていた言葉を正確に最大限駆使している。単語の綴りは出来るだけ音に近い形で表記し、文法については例えば3単現や時制を無視することになろうと、その者がもつ文法力そのままを表し、言い回しは語り手の教養を反映する形で、つまり、無教養であればそのままを表現している。ただし、時制を無視し、現在形を多用しているのは、同時に臨場感を出す為の場合も多く、土着性に拘るあまりに解説不能にならないような配慮もあり、ある程度のgenteel traditionへの目配せをしつつ、こだわりの世界を構築している。

4. 展開部 (第5節～第14節)

第4節では様々な例を次々と示し、Jim Smileyが如何に賭け好きであるかについて紹介しているが、第5節ではmare、第6節はbull pupという賭けの対象を絞ってのエピソードとなっている。どちらも最初は勝てそうもない様子であるものの、最後の最後になって勝ちを収める展開となっている。mareの場合は連戦連勝を匂わせて、後者bull pupはSmileyの手落ちで負けて死んでしまう最後を迎えさせ、第7節以降のfrogでの失敗に撃っている。

第5節は版による違いは少ない。“Jim Smiley”版から“The Celebrated”版になって、1箇

所のみ変えているが、“The Notorious”版で戻している。“The Notorious”版になって、3箇所 comma を減らし、1箇所イタリック体とした程度である。それに比べて次の第6節では“The Celebrated”版での変更は、5箇所を戻しているものの、27箇所にわたっている。最も目立つ変更は、“The Notorious”版における comma 減であり、後の版になるほど、聞き手というより読み手を意識する文章としている。つまり、語っていく上での comma は息継ぎとしての位置づけもできるが、読み手を先行させる場合は不要となる場合が多いといえるからである。また第4節と同様に“joint”は“jint”に変え apostrophe を利用することで実際の音に近い綴りを叶え、土着性を出し、文法的に敢えて間違っただけのものにすること(例: he came → he come, he saw → he see, He gave → He give⁽²⁹⁾)も強化している。特に“he come”という表現の統一化を図っている。この節から目立つのは、二重否定を肯定ではなく、否定の強調としている表現であり、例えば“a dog that hadn't no hind legs”⁽³⁰⁾は「後ろ足が(全く/1本も)ない犬」との意とし、頻繁に使っている。

第6節は、語り手が1人称で自分自身の思いを語って終わっている。悲惨な最後であった bull pup を称え、惜しむ弁を加えた意図は何だろうか。Simon Wheeler は“had an expression of winning gentleness and simplicity upon his tranquil countenance”⁽³¹⁾と表現されているが、この“tranquil countenance”こそ、語り手の絶対条件である。それを敢えて破る意味は何処にあったのだろうか。“It always makes me [Simon Wheeler] feel sorry”⁽³²⁾という発言はあるものの、Smiley の落ち度で死なせてしまった bull pup への惜別の気持ちをセンチメンタルに表すことに作者の狙いはない。また脱線でもない。次の節を考えた上での展開といえる。“he [a bull pup] limped off a piece and laid down and died”⁽³³⁾という悲劇的なシーンを続けるにあたって、暗いままで新しい節に入ることを避けたのである。軽い調子の teller のコメントをつなぎとして使っている。また忘れがちになる teller の存在を再確認させる働きを果たしている。

次にこの作品の題名に結びつく a jumping frog のストーリー展開となるのが、前述したように第7節から第15節まで続く。punctuation については comma を増やしている点がそれまでの節と大きく異なる。第9節から顕著であり、“The Celebrated”版では11増(ただし“The Notorious”版でそのうち2減)、“The Notorious”版で1増となっている。第9節から第15節まで Smiley と a stranger との間のやりとりが主となり、この部分では teller の語りより2人の会話が中心となっている為である。もう1つの特徴は、それまでの節に反して、punctuation より spelling の変更が多い点である。例として、

educate → edercate → educate ketching → catching → ketching
 kept = kept → kep' ben → been again = again → ag'in
 across=across → acrost points → p'int wasn't → wan't

jump=jump→git⁽³⁴⁾

を挙げることができる。俗語を取り入れれば取り入れるほど土着度が高まるものの、卑俗性が濃厚にもなるので、その按配に心を配った形跡が認められる。

第7節では蛙に対してSmileyが如何に熱心に教育を施したかについて紹介し、次に語り手Simon Wheelerの見た成果を表し、またSmileyにとって“monstrous proud of his frog”⁽³⁵⁾となるまでに“Jumping on a dead level was his [frog’s] strong suit”⁽³⁶⁾となったことに言及している。この節でも語り手が1人称で語るところがある。Smileyが仕込んだ蛙が跳んで蠅を捉まえるのを見たことがあるとの件のところで、実際その様子を見たとの言葉をそえることで信憑性を持たせようとのtellerの魂胆が表されている。

第8節に“a stranger in the camp”⁽³⁷⁾が登場し、Smileyとのやり取りが始まる。箱の中に跳び蛙を入れて持ち歩くSmileyにとって、箱の中身を問うよそ者はカモのはずであった。第8節から第12節まで、このよそ者とSmileyが交互に発言する構成となり、tellerであるSimon Wheelerの存在を一切感じさせない作りとなっている。各節でこのどちらかが何をして何を言ったかについて表され、会話部分はdouble quotation marksで囲まれ、その前或は後に、a stranger (2度目からthe feller)あるいはSmiley“says”と必ず記されている。つまり、この2人の言動が、音の響きとしても、視覚的にも、分りやすく明示されている。このよそ者に対するSmileyの第一声は“Smiley says, sorter indifferent like”⁽³⁸⁾となるが、“indifferent”は、跳び蛙の様子にも共通し、“as indifferent as if he [a jumping frog] hadn’t no idea he’d been doin’ any more’n any frog might do”⁽³⁹⁾と表している。両者通じるものがある口調であり、態度である。跳び蛙については、更に“so modest and straightfor’ard as he was, for all he was so gifted”⁽⁴⁰⁾とされているのに対して、Smileyの“indifferent”は、蛙を自慢し、且つ賭けの相手を得られる可能性が目前にある喜びを押し殺し、チャンスを広げる為の作戦としての“indifferent”である。これは同時にtellerのあるべき姿勢にもつながる作者の方針とも合致している。

よそ者に対して箱の中身をSmileyが“it’s only just a frog”⁽⁴¹⁾と説明したところ、“what’s he goof for?”⁽⁴²⁾との問いがかえってきたので、“he can outjump any frog in Calaveras county”⁽⁴³⁾との自慢が可能となる。彼の答えるときの態度は“easy and careless”⁽⁴⁴⁾であり、基本は“indifferent”を装っている。これに対してよそ者を形容する語は“deliberate”である。蛙について“experience”があり、よそ者は“only a amature”との自信があるSmileyは、Calaveras countryのどの蛙より跳べることに40ドル賭けるとの申し出をする。よそ者は“kinder sad like”⁽⁴⁵⁾という様子で、「蛙を持っていれば賭けに応じるのに」と答える。ここまでの2人の会話で構成されている第12節までのあらすじである。“indifferent”への拘り、引用(42)の「何の役に立つ?」という視点、更に経験の有無 (innocence or sophisticated)こそ、Mark Twainの世

界を構築する基本的な要素である。

次の第13節で Smiley が蛙の入った箱をよそ者に預けて、よそ者の為の蛙探しに出かける。第14節は、Smiley が蛙探しをしている間に、よそ者は「考えに考えて」(“thinking & thinking”⁽⁴⁶⁾) Smiley の蛙に細工をし、戻ってきた Smiley と蛙跳び競争を始めようとするまでである。この2節における版による違いは、会話体の部分のみ comma を増やしているところである。前の節と一致する特徴となっている。第15節は蛙跳び競争となるのだが、実況中継のように2匹の蛙の様子を克明に追っている。よそ者の計略に嵌った Smiley の蛙は全く動けず負けてしまう。Smiley は “surprised” と “disgusted”⁽⁴⁷⁾ の状態となり、事態が飲み込めない。一方よそ者はかけ金を取って立ち去るのだが、最後の言葉を発する様子の形容が前と同じ “deliberate” である。このよそ者の言動を表したのが第16節となっている。第17節では、蛙の惨敗を不信に思った Smiley が負けた原因に気づき怒り心頭となり、よそ者を追いかけたが捉まえることはできない。ここで跳び蛙関連のストーリーを結び、“And — ”⁽⁴⁸⁾ で終わっている。つまり次の話に移ろうとして遮られたことを示し、“The Notorious” 版ではこの後に double quotation marks がつけられている。つまり、この第17節を以って Simon Wheeler の teller としての役割は終わるのである。

この跳び蛙のストーリー部分が、この作品の核となっている。蛙や犬につけられた名前から察せられる風刺も作者の狙いであるが、対照的な Smiley とよそ者像、両者のぶつかり合いとその結果にこそ、作者の最大の狙いが含まれる。読み手あるいは聞き手にとっても、粗野で教養がないことがあまりにも明らかな田舎者(西部人)を設定し、彼が蛙を仕込むことに夢中になって、その成果を踏まえて「蛙の教育の必要性」を彼が語るように運んでいるのである。更に、その経験を彼が自慢し “amature” と見くびったのは、東部から来た者(東部人)に対してである。教育や経験を誇る東部人にとっては、とんでもない傲慢であろう。東部人の “thinking & thinking” での策略を見抜かず、いとも簡単に騙されてしまい、Smiley の徹底的な負けとなってしまう。これは、東部の知性、東部の sophistication、文化・教養・思考の勝利、それも鮮やかな勝利のはずである。垢抜けしない Smiley が、泥まみれになって蛙を探している最中に、東部人が “thinking & thinking” 後、蛙に細工をする。両者の姿についていえば、前者には愚鈍だが、ひたむきであり、お人よしでもある。後者は賢さというより狡猾さが目立つ。表面的には赤子の手をひねるような圧勝であるものの、狡猾さによる勝利より、敗北した西部人の愚かともいえる単純さを際立たせることが、作者の意図である。

5. 帰結部 (第18節～)

第18節から、frame narrator が再登場し、語り手に復帰する。Simon Wheeler が呼ばれて席を外さざるを得なくなったゆえである。従って、“Just set where you are, stranger, and rest easy

— I an't going to be a second”⁽⁴⁹⁾ との Simon の言葉は double quotation marks に囲まれている。Simon Wheeler が席を外したのをチャンスとして frame narrator は立ち去ることにするが、戸口で Simon Wheeler につかまる。再び Smiley の飼っていた片目の牛の話を始めようとするのを frame narrator は振り切って、作品は結ばれている。

第18節から第20節までの版による変更は、例えばイタリックや comma 使用を増やすことで把握を容易化、また全体的な単語の統一化 (just を jest とする等) をはかる為のものである。最も大きな変更は、作品最後でなされている。

“Oh! hang Smiley and his afflicted cow!” I muttered, good-naturedly, and bidding the old gentleman good-day, I departed.⁽⁵⁰⁾

以上は “The Celebrated” 版からの引用である。“Jim Smiley” 版では “O, curse Smiley”⁽⁵¹⁾ で始まり、続きは同じであるが、最後に “Yours, truly, Mark Twain.”⁽⁵²⁾ で終わっている。しかしながら、“The Notorious” 版になって、引用 (50) を全面的に削除し、新たな節を設け、次のように書きかえている。

However, lacking both time and inclination, I did not wait to hear about the afflicted cow, but took my leave.⁽⁵³⁾

“Jim Smiley” 版と “The Celebrated” 版の重要な変更は、“curse” から “hang” にしたことであり、その狙いは、“The Notorious” 版における削除&加筆で更に明確化されている。Simon Wheeler に対して “sociable” という形容を使った frame narrator は引用 (50) にあるように、“muttered, good-naturedly” という態度しか示せない。怒りなどの感情をあらわにしていなのである。叫んでいないのである。“curse” よりも “hang” の方が genteel tradition 対策となるが、この程度の変更では frame narrator の感情は手に取るようになってしまう。引用 (50) 及び (51) の double quotation marks 内の言葉から受け取れる激しい感情は、Simon Wheeler には伝わらなくとも、読み手には分ってしまう。それゆえ全面削除の上、引用 (53) に書きかえたのである。これによって frame narrator の気持ちの判断は、読み手に委ねられることになる。これでこそ Mark Twain が求めた語り手の絶対条件を満たしたことになる。第20節における frame narrator による “the enterprising vagabond *Jim*”⁽⁵⁴⁾ という判断や決めつけ、及び “by your leave”⁽⁵⁵⁾ に含まれる不快感や皮肉は残されたが、“The Notorious” 版になって、“tranquil countenance” は保たれたのである。

Simon Wheeler は引用 (49) にあるように frame narrator のことを “stranger” と呼んでいるが、跳び蛙を嵌めたのも stranger の立場にある者であった。後者は東部からやって来た者、前者は東部からの依頼で極西部にやって来た西部人とする、どちらも東部人によって一杯食わせられる展開であり、ここに作品の大きなテーマがある。作者は、東部的価値対西部的価値の衝突と結果、及び東部的社会と西部的世界の縮図を、この作品を通して呈示しているのである。それも後の版ほど鮮明にしているといえる。オリジナリティ云々を超える Mark Twain の世界がここに繰り広げられている。

作品化するにあたって、草稿の段階から、その後作者が柱としていくことになる種を植え、たくさんの芽を出させている。改訂を重ねる毎にその芽を大きく育てていったことが、3つの版比較によっても分る。この芽の1つは、東部的価値観（を担っているもの）と西部的価値観（を担っているもの）相克の構図、2つ目の芽は、“experience” 及び “amature” という語が使われているが、innocence と対照的な「ずるがしこい知性」の呈示である。次の芽は、ストーリーテリング術への拘りである。Mark Twain は作家としてのみならず講演者としても名を馳せたが、この拘りが、この作品の登場人物に反映していることは見てきた通りである。更にどの場面にも聞き手がいるという設定での展開としているのも関係している。4つ目は、何重にも層がある構成にある。語り手を複数使うことで結晶しているが、複眼の世界を構築している。5つ目は、言葉にある。作中人物の俗語・口語使用度や文法重視度あるいは軽視度を変えているが、これによって、それぞれの出自、教養度、人間性などが現れるようにしている。ここでは frame narrator, Simon Wheeler, Smiley, 及びよそ者が対象となるが、誰を対象として語っているかによって変わることもあり、会話をするところのみならず、語りの部分でも違いが認められる。

Hannibal にある Mark Twain の家を作者ではなく Tom Sawyer の家として、洞窟も Tom Sawyer が関わった場所としてみる傾向が極めて強い。敢えて錯覚の世界を享受している。the Jumping Frog Story の場合は、跳び蛙が強烈な存在として現在も生きている。この作品を読まなくとも Mark Twain の jumping frog を知らないアメリカ人は少ないだろう。Calaveras County では毎年蛙跳ばし競争があり、全米のみならず、日本でもその様子が報道されることもある。Calaveras の Angel's Camp の町は蛙で溢れているが、ビジターセンターでようやく見つけた Mark Twain の作品は、表紙に Centennial Edition と付記された *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County*⁽⁵⁶⁾ というタイトルの冊子であった。しかし、この薄い冊子の中身は “The Notorious” 版であり、表紙の作品名と一致しない。その Publisher's Note⁽⁵⁷⁾ には、“This little book is a facsimile of the 1875 edition”⁽⁵⁸⁾ とあるものの、表紙の題名と一致させていないのは、どのような意図に基づくのだろうか。作品の題名というより、celebrated の意味、つまり「名高き」を便宜的に生かすことにあるのだろうか。この冊子の名前を意味するもの

であって、中身の作品名を指すものでないということだろうか。この題名に続いているのは“By Samuel L. Clemens”⁽⁵⁹⁾であって、Mark Twainではない。Mark Twainという作家名は、Publisher’s Noteの第1行目になって、double quotation marksで囲まれて記されている。ここでdouble quotation marksを挿入したのは、「所謂」とか「他ならぬ」とかの意で、強調し注目させる為であろうか。あるいはオリジナリティが疑わしいゆえ、揶揄しているのだろうか。何れにせよ、このPublisher’s Note以外でMark Twainという作家名は全く見つからない。藤元ともいべきAngel’s Campにおいてさえこのような作品しか見つからなかった。

生前没後にわたって、本作品群が以上のように曖昧模朧とした状態が続いているのは、著作権が認められない時代に一大ブームを起こしたがゆえに、瞬く間に全米のみならず欧州でも原作者をなおざりにして様々な版が出回ったという出発点に問題があり、その後Mark Twain自身も改訂を続けた為に、混乱に拍車をかけてしまったゆえである。本論では、“The Celebrated”版と“The Notorious”版については、Mark Twainが直接関わったバージョンのリプリント版を使ったが、“Jim Smiley”版についてはUniversity of California Pressから刊行されている版をtextとした。California大学の遺稿研究の労作とはいえ、この版とて作家自身ではなく他人の眼を通した以上、限界がある。完璧はない。Mark Twainがどのように現在まで受容されてきたかについての歴史をたどる研究が目立つが、作品の詳細な研究が基本であり土台となっていくことが望ましい。しかるにtextとしての真偽性が立ちふさがり、もどかしさと困難を避けられない現状である。

Notes

- (1) 拙論「the Jumping Frog Story研究——Mark Twainの世界」(淑徳大学総合福祉学部研究紀要第43号, 2009), p.111参照.
- (2) その一例として以下の書が挙げられる. “The Notorious Jumping Frog Story of Calaveras County” *The Complete Short Stories of Mark Twain* (New York: Doubleday, 1957) Edited by Chales Neider.
- (3) 拙論「the Jumping Frog Story研究——Mark Twainの世界」, p.112 参照.
- (4) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” *Early Tales and Sketches*. Vol. 2 (1864-1865). Edited by Edgar M. Branch and Robert H. Hirst. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1981. p.282.
- (5) 拙論「the Jumping Frog Story研究——Mark Twainの世界」, pp.112-113参照.
- (6) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County, And other Sketches*. Edited by John Paul. New York: Charles Henry Webb, 1867. Reprinted in *The Oxford Mark Twain*. Ed by Shelly F. Fishkin. New York: Oxford University Press, 1996. p. 7.
- (7) Twain, Mark. “How to Tell a Sotry.” *How to Tell a Story and Other Essays*. New York: Harper & Brothers Publishers, 1897. Reprinted in *The Oxford Mark Twain*. Ed by Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford University Press, 1996. p. 4 参照.
- (8) 拙論「the Jumping Frog Story研究——Mark Twainの世界」, p.120参照.
- (9) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.282.
- (10) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” pp.7-8.
- (11) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.282.

- (12) Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.8.
- (13) Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.13. Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.32.
- (14) 拙論「the Jumping Frog Story 研究——Mark Twain の世界」, p.112参照.
- (15) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." p.283.
- (16) *Loc. cit.*
- (17) *Loc. cit.*
- (18) *Loc. cit.*
- (19) *Loc. cit.*
- (20) *Loc. cit.*
- (21) *Loc. cit.*
- (22) *Loc. cit.*
- (23) Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.9.
- (24) Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.30.
- (25) Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." pp.9-11.
- (26) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." pp.283-284.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." pp.9-11.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." pp.30-31.
- (27) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." pp.283-284.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." pp.9-11.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.31.
- (28) 拙論「the Jumping Frog Story 研究——Mark Twain の世界」, p.121参照.
- (29) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." p.285.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.13.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.32.
- (30) *Loc. cit.*
- (31) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." p.282.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.8
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.30.
- (32) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." p.285.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.13.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.32.
- (33) Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County" . p.13.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog' . In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." p.32.
- (34) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." pp.285-287.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." pp.14-17.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil." pp.32-34.
- (35) Twain, Mark. "Jim Smiley and His Jumping Frog." p.286.
Twain, Mark. "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County." p.15.
Twain, Mark. "The 'Jumping Frog.' In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized

- Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.33.
- (36) *Loc. cit.*
- (37) *Loc. cit.*
- (38) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.15. Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.33.
- (39) *Loc. cit.*
- (40) *Loc. cit.*
- (41) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.286.
Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.16.
Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.33.
- (42) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.286.
Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.16.
Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.34.
- (43) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.16.
- (44) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.286.
Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.16.
Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.34.
- (45) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.16.
Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.34.
- (46) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.287.
Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.17.
Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.34.
- (47) *Loc. cit.*
- (48) *Loc. cit.*
- (49) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” pp.18-19.
- (50) *Ibid.*, p. 19.
- (51) Twain, Mark. “Jim Smiley and His Jumping Frog.” p.288.
- (52) *Loc. cit.*
- (53) Twain, Mark. “The ‘Jumping Frog.’ In English. Then in French. Then Clawed Back Into A Civilized Language Once More By Patient, Unremunerated Toil.” p.35.
- (54) Twain, Mark. “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County.” p.19.
- (55) *Loc. cit.*
- (56) Clemens, L. Samuel. *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (Colorado: Filter Press, 1965).
- (57) *Ibid.*, p. iii.
- (58) *Loc. cit.*
- (59) *Ibid.*, front cover.

A Study of the Jumping Frog Story (Ⅱ) — Mark Twain World

Mamiko KISHIGAMI

Mark Twain's "Jim Smiley and Jumping Frog" brought him quick literary success and fame throughout the United State. It was reprinted or pirated in newspapers and periodicals not only in the United States but also in Europe. This story was subsequently revised and published under a number of different titles.

"The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County"

"The Notorious Jumping Frog of Calaveras County"

"The Jumping Frog in English, Then in French, Then Clawed Back into a Civilized Language
Once More by Patient, Unremunerated Toil"

"The Private History of the Jumping Frog' Story"

Collectively, these are usually referred to as the Jumping Frog Story.

Here, "Jim Smiley and Jumping Frog", "The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County" and "The Notorious Jumping Frog of Calaveras County" are analyzed and compared one another.